様式４（第２条関係）

博士（口腔科学）学位論文内容要旨

受付番号	甲第　7　号※	氏　名	中　山　真　理
博士（口腔科学） 学位論文の題名	Analysis of factors related to early adolescent health （思春期前期の子どもの健康に関する要因分析）		

思春期では,身体と脳は共に変化,協力することで発達し,脳回路の変化の質を基盤として,よりよい自分を求める気持ち,目標の定まり,社会との交流への動機につながる.また,身体的,社会的,情緒的,認知的な発達を遂げる時期に身についた習慣は成人期まで続くことが多く,社会・経済的要因は,健康状態や行動に長期的な影響をもたらす可能性が指摘されている.したがって,心身の成長,変化のために良好な家庭環境やそれに対応する健康支援は重要である.しかし,重要な時期ではあるが一過性のことと捉えられることが多く,この時期の特徴的な習慣や行動を子どもが置かれた家庭や健康と関連付けて調査した研究はあまりみられない.本研究の目的は,身体的,社会的,情緒的,認知的な発達に重要な時期である思春期前期の子どもの健康に関わる要因を検討することである.研究仮説は家庭状況が子どもの生活リズム,不安・孤独,メディアの使用に影響を及ぼし,これらを経て健康に作用するとした.分析では,要因の相互関係を明らかにするため,共分散構造分析の手法を用いた.構築したモデルは,性別,生活層,むし歯の状況に関連した生活層において違いを調べた.対象は,関東域の地方自治体が子どもの生活状況を把握するために実施した「子ども生活調査」のうち,欠損値のない 4,063 組の養育者とその中学 2 年生の子どもへの質問票項目である.対象者のうちわけは,男子 1,927 人(47.4%),女子 2,136 名(52.6%)で,養育者は,母親 3,822 名(94.1%),父親 227 名(5.6%),祖母・兄弟 6 名(0.1%),それ以外 8 名(0.2%)であった.生活層は,生活困難非該当 2,679 名(65.9%),中間 980 名(24.1%),生活困難 404 名(9.9%)であった.むし歯の状況は,ない 3,135 名(77.2%),ある 272 名(6.7%),わからない 656 名(16.1%)であった.

分析の結果,家庭の経済状況は,子どもの健康状態に直接的には影響しておらず,家庭からの教育投資を介して学習意欲を高めていた.また,子どもをほめる, 気持ちを受けとめて話を聴く,子どもの興味のあること一緒に調べるとした応答性のある養育態度は,生活リズムを整え,心身の状態を高めていた.むし歯がある,あるいは,わからないと回答した生活中間層と生活困難層の子どもにおいては,こうした家庭の状況からの有意な影響は確認されなかった.思春期に特徴的な不安や孤独感はメディアの使用を促す影響を示し,その影響は女子のほうが男子にくらべ有意に強かった.また,メディアの使用は学習意欲を低め,甘味飲料ならびに菓子の摂取頻度を増やす影響を示し,その影響は男子のほうが女子にくらべ有意に強かった.さらに,性別,生活層,むし歯の状況に関連した生活層のいずれの分析においても,子どもは学校での友人や教師との交流を通して学習意欲と身体の状態を高めていた.これらの結果から,思春期前期の子どもは家庭からの影響を学習意欲や生活リズムに受けており,応答性のある養育態度で接することが重要であることが示唆された.また,思春期に特徴的な不安や孤独感はメディア使用を促し,さらにメディア使用は健康に悪影響を及ぼすことに性差を考慮して注意を傾ける必要があることが示唆された.加えてこの時期の子どもには学校での友人や教師との交流を通して学習意欲と身体状態を高めるしなやかさと頑強性があるからこそ,学校生活に目を配る必要があることが示唆された.思春期の特徴と家庭の経済状況が健康に及ぼす影響について更なる研究が必要であると考えられた.

※欄には記入しないでください。

博士（口腔科学）学位論文審査結果の要旨及び調査委員の氏名

受付番号	甲 第７号	氏　　名	中山　真理

主　査	副　査
橋本正則	副　査　神　光一郎
	副　査　楠本哲次

本研究の目的は、思春期前期の子どもの生活状況と関連する要因を検討し、適切な健康支援を目指すことにある。関東圏域の自治体が実施した「子ども生活調査」のうち、約 4,000 組の中学 2 年生の子どもと養育者への質問票に対する回答を対象とした。 思春期に特徴的なメディア（インターネットコンテンツなど）の使用や生活リズムの行動因子、学校での交流や学習意欲，身体の調子などの健康因子、家庭の社会・経済状況や教育に対する投資などの家庭因子、う蝕の有無と不安や孤独の因子との相互関連性について、共分散構造分析を用いて分析した。

家庭の状況において、教育投資は子どもの学習意欲に、応答性のある養育態度は生活リズムや心身の状態に関連し、生活困難層でう蝕がある（わからない）と回答した子どもに有意な影響はなかった。子どもは性別やう蝕の有無にかかわらず、家庭からの影響を習慣や行動、学校での友人や先生との交流を通して、学習意欲と身体の調子を高めた。不安と孤独に関して、女子ではメディアの使用を促す影響、男子ではメデイア使用による学習意欲の低下、甘味飲料と菓子の摂取がふえる影響を受けていた。

中学 2 年生は受験期前の時期にあたり、親の期待や願いが経済力を通して、子どもの学習意欲を高めていると考えられる。また、話しを聞く受容的な養育態度は子どもの安心の“みなもと”となり、一緒に調べることは、知識やスキルの獲得、社会化を促すと考える事ができる。さらに、友人や先生との関係を通して社会性の発達する時期でもあり、子どもの学校生活に目を配ること、応答性のある養育態度が重要であることを示唆している。一方、生活困難層の家庭では、世帯の経済状況が養育の質を低下させ、子どもの健康行動を促さない流れが推察された。

加速化する情報技術の変化からの有害な影響を見過ごさずに対応すること、家庭の経済格差を視野に入れて、不利になる可能性のあることへの防御支援を慎重に検討していくことが重要であることがわかった。

以上の研究内容から、本研究が博士（口腔科学）の学位を授与するのに値すると判定した。

最終試験結果の要旨及び博士（口腔科学）学位授与審査調査委員の氏名

受付番号	甲 第７号	氏　名	中山　真理

主　査　橋本正則	副　査　神　克一郎 副　査　橋本哲次

（最終試験結果の要旨）

大学院医療保健学研究科（博士（口腔科学）学位授与調査会調査委員）の行った試験に合格した。